

C 次の文章を読んで、問題15と問題20に答えなさい。

ことばは意味を持っています。意味があるからこそ、発言が正しかったり、間違っていたり、適切であったり、不適切であったりします。失言めいたことを誰かが述べて、「え、それどういう意味ですか」「あ、いやーそういう意味ではなくてですね」とときに苦しい言い訳をすることもあるでしょう。

しかし、意味とは何でしょうか。「意味」とはどういう意味なのでしょうか。「意味」という語は日常的にかなり頻繁に使われます。

私たちが「意味」ということばを使って語るものの中にはいろいろなものが含まれ、それらを統一的に理解することはおそらくできないし、その必要もないでしょう。

神経科学の哲学者パトリシア・チャーチランドは、「火」という語がバラバラの事物に当てはめられてきたということ、そして、「火とは何か」という理解が時代を経て大きく変化してきたことを指摘します。

素朴な理解では、「火」とは、たき火など光や熱を出している、触ると火傷するようなものでしょう。また、太陽や雷など、とにかく光って熱いものも火の一種だと思えるでしょう。「太陽が燃えている」などと言いますね。蛍の光はどうでしょうか。「蛍火」（ほたるび／けいか）ということばは相当古くからあるようですし、そもそも「光」という字は人が火をかざしている姿を描いたものようです。

日常的な感覚として、これらの事物を「火」で一括りにしても別に構わないわけですが、その一方で、現代の理科教育を受けた私たちは、これらがそれぞれかなり異なった現象であることも理解しています。「火」というものの本質——とあるものについて、それがなければそのものでなくなってしまうようなもの——を「酸化現象」として把握すると、右にあげたものだと、たき火だけが酸化を起こしており、太陽の光は核分裂、蛍の光は酵素による化学現象だということが分かっています。むしろ、金属のサビのような、ゆつくりとした酸化現象を「火」に含めてもよいわけです。

まとめると、日常的に私たちは「火」ということばでかなりバラバラの事物を指し示します。そして、厳密に学問をするような場面では、線引きをはっきりさせて、ここからここまでの現象を「火」とします、と決めてもいいわけです。

『「意味」についても同様です。夏目漱石の『三四郎』では、主人公の三四郎が、ヒロインの美禰子の二重まぶたに意味を見つけます。またその意味のうちには「霊の疲れ」と「肉の弛み」を認めます。味わい深いですが、激しい酸化（燃焼）の専門家がオーロラや蛍火の仕組みについて語らなくてもよいように、言語を探求する私たちが「意味」で示されるものごとすべてについて語らなくてもよいわけです。

「意味とは何か」という問いに答えたいわけですが、その答え方は複数あるように思わ

れます。あるいは、その問いには、複数の解釈を与えることが可能だと言ってもいいでしょう。「〜とは何か」と尋ねられたとき、その答えの方針のようなものは単一ではなく、私たちは臨機応変に答え方を変えています。

たとえば、「CDとは何か」と聞かれたとき、「ああ、これですよ、この円盤状のプラスチックのことですよ」と物体を差し出すかもしれないし、あるいは、「ああ、昔そういうキカクがあつてですね、音楽データを再生するためのものですよ」と答えるかもしれません。

前者は、コンパクト・ディスクとは一体何か、どのようなものか、その存在そのもの説明しており、後者は、コンパクト・ディスクとは一体何のためのものか、その役割や機能を説明しています。

どちらがより適切な、よりよい答えなのかは、その時々の場合次第です。「CD」が音楽メディアだと知っていても、それが何なのか見当もつかない若い人に対しては、前者のような答えを出すのが適切な場合があるでしょう。

「〜とは何か」という形式の問いに対する答え方は他にもあるかもしれませんが、以下では、それはそもそも何なのか、どういう仕方で存在しているのか、触ったりできる物体なのか、それとも触ったりできるものではないのか、といったことを説明する答え方を「存在論的な答え」、それはどんな役割を果たすのか、どういう仕組みで働くのか、といったことを説明する答え方を「機能的な答え」と呼ぶことにします。

もちろん、どういう機能を持つているかが、どういう存在かに依存するときもあるのです、これら二つの答え方は密接に関連していますが、「意味とは何か」という問いを議論する際には、存在論的な答えを出したいのか、機能的な答えを出したいのか、どちらかはっきりさせた方が議論がよりスムーズに進みます。

「意味とは〜です」と、意味がそもそもどういう存在なのか特徴づける立場は、大きく外在主義と内在主義に分けることができます。ここでの「外」と「内」は、人間の心／頭の外と内を指します。つまり、意味の外在主義者は心の外に意味が存在すると考え、内在主義者は心の中に意味が存在すると考えます。

外在主義者は、意味を具体的あるいは抽象的な事物の一種とみなし、内在主義者は、意味を心の働きのイッカン[□]とみなします。伝統的に、哲学者の間では前者の考え方が優勢で、言語学者の間では後者の考え方が優勢であるように見受けられます。

まず外在主義的な意味のとらえ方を見てみます。(1)と誰かが誰かにすごんだとき、その中に出てくる単語「てめえ」の意味は何でしょうか。

(1) てめえぶん殴ってやる。

外在主義によると、「てめえ」の意味とはその発話の聞き手となっている人物そのものと

なりません。確かに、話者が殴ろうとしているのはその人物であって、頭の中にある人物についてのイメージなどではありません。(1)は、「わたしが心に浮かべたあなたのイメージをこれから殴りますね、おほほ」というようなことを伝えたいわけではなく、聞き手の身体に危害を加える旨を告知しており、聞き手は実際に回避行動をとるなど、何らかの対処が必要でしょう。身体など、頭の外にあるものが意味だというわけです。

言い換えると、外在主義における意味とは「指示」あるいは「指示対象」だと考えることができます。「てめえ」によって、話者は人物を指し示しています。指し示された人やものを「指示」(あるいは「指示対象」)と呼ぶとすると、「てめえ」といった語の意味はその指示となります。意味についての外在主義は「指示主義」と呼ばれることもあります。

外在主義は文のレベルへも。カク^{カク}チョウウ^{ウウ}することができません。(2)と誰かが吐き捨てたとき、その発話全体の意味は何でしょうか。

(2) 和泉は偽善者だ。

(2)の部分である「和泉」の意味／指示は和泉その人でしょう。「偽善者だ」の部分は、世の偽善者たちが共通して持つ性質を指示すると考えることができます。はっきりとは分かりませんが、偽善者であるという性質は、「何らかの正しい理念を明確に支持しておきながら、それに違反するような行為を頻繁にする」というようなものかもしれません。外在主義的な立場のひとつは、こうした人物や性質を組み合わせた「ラッセル的命題」が文の意味だというものです。文の部分である「和泉」と「偽善者だ」の意味、つまり和泉その人と偽善者であるという性質によって作られる特殊なものが、「和泉」と「偽善者だ」によって構成される(2)の意味となります。イギリスの哲学者バートランド・ラッセルが、若い時に提出したアイデアがもとになっているため、このような名前がついています。

「命題」という用語は、伝統的に、推論を研究する論理学におけるひとつの単位として使われてきました。推論とは「みんな偽善者だ。和泉もみんなの一人だ。だから、和泉は偽善者だ」といったものを想定してもらえば結構です。この推論に登場する(2)のような平叙文それぞれを命題とみなすこともできますし、平叙文が表す意味を命題とみなすこともできます。ところで、推論は、正しい／真である前提から、正しい／真である結論を導くためのものです。そのため、推論に登場する命題の基本的な性質のひとつとして、命題は真偽の評価が可能だ、というものがありません。命題は正しかったり間違っていたりする、あるいは、平叙文が与えられたとして、私たちは実際の状況を踏まえてそれを真だと思ったり、偽だと思ったりする、ということなのです。

ラッセル的命題も、真偽の評価が可能です。(2)が表す命題は、和泉が実際に偽善者の性質を発揮していれば、真であるし、そうでなければ偽となる、というわけです。ということは、命題の構成要素の多くは具体的な人やものですが、命題そのものは具体的な事実

や出来事ではないことに注意してください。(2)が表す命題が事実そのものなら、命題が表された時点で、それを否定することなどできなくなってしまう(否定させてください)。命題の構成要素である人物は、当然見たり触ったりできますが、命題そのものは抽象的な何かで、見たり触ったりはできない、ということになります。

意味についてのラッセルの外在主義をまとめると、単語は具体的な人物や性質などを意味として表し、文は、そうした人物や性質などによって作られる、抽象的命題を意味として表します。「てめえ」などの意味については、とても素直で分かりやすい考え方のようには思えますが、文全体の意味について考え出すと、急に文字通り抽象的な話に変わりました。

ことばの意味をその指示対象と同一視する、外在主義的な立場を採用するひとつの大きな利点は、⁽¹⁾それにより言語の公共性を直接的に担保できる、ということところです。特にフレーゲやラッセルといった、一九世紀から二〇世紀にかけて活躍した言語哲学者たちは、数学や経験科学を発展させるために言語哲学に取り組みました。「すべての自然数には後続する自然数がある」といった文の正しさをいかにして証明するのか、といったことに関心があつたのです。

もし、文の意味が客観的な指示対象ならば、「すべての自然数には後続する自然数がある」「いや、違う」などと数学者同士が議論をしているとき、そうした発言の内容が噛み合っていることが了解できます。それが何であれ、自然数について語りつつ、その特徴について議論しているのです。意味の外在主義とは、言語の公共性を説明するために、言語の意味そのものが公共的そして客観的なものだとする発想なのです。

一方、文の意味がたとえば個人の心のイメージであつたとしたら、数についての議論などという公共的な作業はどのように成立するのでしょうか。「自然数」という語が心に喚起するイメージは人それぞれでしょう(私は中学校か高校の教室をなんとなく思い出します)が、みなさんはどうですか?。しかし、数学をしているとき、私は私の「自然数」についてのイメージについて語りたいわけではないのです。

「一」、意味の外在主義からただちに導かれるひとつの帰結は、ことばの意味の詳細について、話者がコントロールできるわけではない、ということ です。「そのような意味で申し上げたつもりはない」「そのような意味でとられたとするならば、ご迷惑をおかけして申し訳ない」などといった、謝罪にもならない言い訳を耳にすることがあるかと思えます。これらがどうして謝罪になつていないかという点、ことばの意味——どの語句が何を指しているのかということ——は公共的で客観的な事実であり、個人がコントロールできる出来事の範囲を超えているからです。

さらに、意味が心の中のイメージなどでないならば、その話者に意味が何かを教えるもらう筋合いすらありません。フルーツサンドを買ってきて食べるとき、それがおいしいかどうかは、そのフルーツサンド自体にかかっています。フルーツサンド職人の心意気、深

層意識について延々と語られても困ってしまうわけです。同じように、誰かがもし「不適切」な発言をしたならば、そこで表現された □ 内容が不適切だったということであり、発言者の深層心理や生い立ちなどが出る幕はほとんどありません。どれだけ崇高な心意気とともに作られたとしても、まずいフルーツサンドはまずいのです。

(和泉悠『悪い言語哲学入門』より)

問題15 傍線部A～Cのカタカナを漢字に直した場合、正しい組合せとして、最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

①	A	規	B	環	C	張
②	A	規	B	環	C	徴
③	A	規	B	貫	C	張
④	A	期	B	間	C	徴
⑤	A	機	B	貫	C	張

問題16 傍線部ア)「意味」に関する説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① われわれが普段使用する「意味」という言葉は曖昧ではつきり定義されていないので、厳密な学問ではきちんとした定義から出発する必要があるということ。
- ② 我々が使用している意味という言葉は多義的なので、厳密な学問ではそうした複数の意味を一つにまとめて使う必要があること。
- ③ 火の本質が酸化現象であるように、「意味」という言葉が示すものにもその本質があり、学問ではそうした本質に基づいて言葉を使用すべきだということ。
- ④ 「意味」という言葉で示されるものにはさまざまなものがあるが、言語を探索する学問では、「意味」ということで話を限定して論じてもよいということ。
- ⑤ 「火」で一括りにしているものがかかなり異なる現象であることを理解しているように、「意味」に関する異なる現象が指示されていると理解していること。

問題17

傍線部(イ)「それにより言語の公共性を直接的に担保できること」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① 数学における「自然数」のような言葉はその指示対象と同一であり、数学における議論できちんと話が噛み合うのは言語の公共性が自ずと担保されているから。
- ② 外在主義的な立場では、単語は具体的な人物や性質を意味として表すものの、文はそうした人物や性質からなる抽象的命題を意味することになるから。
- ③ ラッセルの外在主義の場合、ラッセルの命題は見たり触れたりすることができない具体的な事実や出来事であるが、構成要素は抽象的な何かであるから。
- ④ 外在主義に立つと、数学者同士の議論における「すべての自然数には後続する自然数がある」という文の正しさを直接証明することができるようになるから。
- ⑤ ことばの意味が客観的な指示対象であれば、言葉の意味そのものが公共的であることになり、言葉を用いた作業が公共的な作業であることになるから。

問題18

空欄「」に入れるのに適当な語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① ところが
- ② それゆえ
- ③ さらに
- ④ たとえば
- ⑤ つまり

問題19

空欄「」に入れるのに適当な語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① 公共的
- ② 主観的
- ③ 心理的
- ④ 抽象的
- ⑤ 論理的

問題 20

問題文の内容と合致するものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

- ① ある神経科学の哲学者は、「火」という語がバラバラの事物に当てはめられてきたこと、「火とは何か」という理解が時代を経て大きく変化してきたことを指摘しているが、厳密な学問では、ここまでの現象が火であると定義されている。
- ② 「くとは何か」という形式の問いへの答えは、そもそも何なのかということの説明する「存在論的な答え」とどんな役割を果たすかを説明する「機能的な答え」のいずれかに分類される。
- ③ 外在主義における意味とは、発話者の頭の中にあるイメージではなく指示や指対象のことなので、哲学者の間では外在主義的な意味の理解の方が意味を心の働きとする内在主義より優勢であった。
- ④ 「命題」という用語はもともと推論を研究する論理学の言葉である。推論は、真である前提から真である結論を導くためのもので、推論に登場する命題の基本的な性質の一つに、真偽の評価が可能だということがある。
- ⑤ 「そのような意味で申し上げたつもりはない」などが謝罪になっていないのは、言葉の意味が公共的で客観的な事実であり、個人のコントロールを超えたものであることを、謝罪者が理解していないからである。